哀しい旅人たち

胡桃沢耕史

胡桃沢耕史／哀しい旅人たち

哀しい旅人たち

一九九四年四月二十五日　初版発行

著　者――胡桃沢耕史
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
〒102　振替東京三―一九五二〇八
電話　営業部〇三―三八一七―八五二一
編集部〇三―三八一七―八四五一
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Printed in Japan
ISBN4-04-872802-4　C0093
日本音楽著作権協会（出）許諾九三〇二〇二二―三〇一

哀しい旅人たち

装画／中島美弥

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

辺疆(へんきょう)ちゃんの恋　五
アンデスの娘　三五
国境のロシア娘　六七
マドンナの初夜　九九
汝(な)が為に鐘は鳴る　一三一
白夜のバイオリン　一六三
さい果てのトランペット　一九七

辺疆（へんきょう）ちゃんの恋

一

もう四十を大分すぎた、あまり売れないがほどほどには仕事のあるルポライター兼軽評論家の木島健三を中心にして、十五人のマスコミ関係の若い男女が、シルクロードの奥地のホータンで、五日ばかり立ち往生をしたことがあった。

数年前に日本中に、シルクロード熱が沛然として湧き起こった時のことだ。

丁度ＮＨＫのテレビが、喜多郎の幻想的な音楽にのせて、しきりにシルクロードの秘境の紀行を放映していた。

何人かの仲間がシルクロードへ行こうということになり、それには世間の人がよく行く敦煌や西安ではさして新鮮味がない。思いきって誰も行かない珍しい土地へ行こうじゃないかと、出発前に地図の上であちこち探した。そのうちに、タクラマカン砂漠のはるか奥にひとつだけある、ホータンという小さなオアシス都市を発見した。

何となく神秘めかしい町だ。説明書によると、近くに白玉河と黒玉河の二つの河があり、装飾品として珍重されている玉が河原にごろごろ転がっているため、太古以来、その土地へ近づく旅人は途中で役人に捕まえられて、有無を言わさず河原で首を斬られたという伝説がある町

だ。

しかもその年、昭和六十二年は、まだ天安門事件は始まっておらず、中国が再び観光客に固く門を閉ざしてしまう時期の二年前だったので、たまたま天山南路入口のウルムチ市から、ホータン市へのタクラマカン砂漠を一っ飛びの航空路が開発されて、世界の一般観光客に開放すると宣言された年であった。

うまくそれに乗れば、ホータン市へ入る一番最初の日本人の名誉を得ることができるかもしれない。そういう功名心もあった。

木島健三を中心とする旅行団は、九月三日にホータン市へ入るという、文字通り最初の飛行機便にうまく乗ることができることになった。

北京、ウルムチで各一泊して、四日目に三十人乗りの飛行機で、草むらを切り取って作ったばかりのような、臨時飛行場に到着したときは、さすがに全員の胸は、ここへ入る初めての日本人だという誇りで躍っていた。

飛行場の仮り小屋の上に、大きな木の看板がかかっているが、そこには和田市と書いてある。ホータンは近代の中国の簡字体では、和田と書くらしいが、一行は、これではもう千年以上もの歴史がある、この中央アジアの中で最後の秘境である町へ着いた気がしないと文句をいった。ここはぜひ昔風に、和闐と書いてもらいたいところだった。

みな、この自分たちの手作りのシルクロード旅行がいよいよ今日から本格的に始まるというので張り切っていた。ホータンの町としても、その日、九月三日は、この辺境の都市に外国人観光客が初めて来る日だというので、市の有力者や役人が二十人ばかり空港に迎えに来ていた。

それでも広い草原を臨時に切り開いて、整地したばかりの飛行場はシーンと静まりかえっている。あまりの周囲の広さに、少しぐらいの人の話し声などは、空中に吸い込まれてしまうらしい。ウイグルの民族服を着た三人の少女たちが、旅行団の団長であるルポライターの木島健三に花束を差し出した。

中国の旅行には、全行程に付き添う国営の中国旅行社派遣の添乗員と、出先で迎えに来て、宿舎やその後の乗物の手配をする、現地添乗員の二人がいつもつく。

全行程につく添乗員は、金さんという名の青年だった。殆ど日本人同様の発音で話す。北京で待っていて、ずっとここまで同行したが、全員がしばらくは中国人だとは分からなかった。現地でいろいろ交渉したりするとき、飛行場の係員や、ホテルの従業員でさえ、みな金さんを旅行団についてきた日本人の世話役だと思っていた。

草むらを切り開いた臨時のホータン飛行場に出迎えた、辺さんという若い女性通訳は、まだせいぜい二十歳前後だった。色がやや浅黒くて、鼻も低く、偏平な顔だちで、北京などでよく見かける、色の白い、切れ長な瞳をした娘とはまったく違う顔をしている。体つきも日本の高校生によくある、小柄で、チマチマしていて、胸も腰もまだ殆ど実っていない感じだ。この子もなかなか達者な日本語を話す。通訳は、中国での最大のエリート職業なので、試験は大変難しいといわれている。

ときどき『それ駄目なことあるよ』というような、中国人特有の言い回しをすることもあるが、大体の話し言葉は、癖がなく、正確だ。

金通訳がいて、現地の通訳もつけるのは余分のようだが、中国は広すぎる。ましてホータン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

からタクラマカン砂漠を巡る一帯は、中国の漢民族は少なく、トルコ系のさまざまな遊牧民族、ウイグル人、ダッタン人などが混在している地帯なので、日本語と中国語の達者な金さんにも歯が立たないらしい。

辺というお嬢さん通訳は、若いわりには仕事が手慣れていて、招待所（ホテル）の手配や、バスの手配など、すぐテキパキとやった。ほどなく一行は、このシーンとした荒野の真ん中の飛行場から、二キロばかり離れたホータン市街へ向かった。

バスが出たあとで、簡単な整備や給油を終えた飛行機がまた飛び立って行き、走りだした車の窓から見える青空の中へ、吸いこまれるように消えてなくなってしまった。大部分の人は、このことを特に感じはしなかったが、中に二、三人、その大空へ溶けこんでいく飛行機を見て、もうこの土地から出られないのではないかという、不安を持った人もいたようだ。

ここで、三日泊まって、白玉河原で玉探しをやり、既に三百年以上も前に消滅してしまった王朝の遺跡を見て、ミイラが多数保管されている博物館や、物産館なども見学する。四日目の朝には、同じ飛行機が飛行場に待っている。日本では多分見られないだろう、糸車で糸を紡ぐ、絨毯工場も見学し、この砂漠のはずれにポツンと建っているオアシス都市の全てをゆっくり観光する予定であった。

人口が周辺の遊牧民族を全部いれても三万はいない、小さな都市だ。ここのタクラマカン砂漠からインドのヒマラヤ連峰まで展開する、中国の本土部分にも匹敵するような、広大な無人地帯の中の、唯一の大都市である。

それにしても、招待所へ入って、観光を始めてから三日間の日数は少し長すぎた。二日目に

は、博物館から白玉河にも行って、玉は一つも採れず、石ばかり探しての一日が終わり、絨毯工場も、バザールも見て、三日目の午前中には行く所がなくなった。午後はホテルでぼんやりして、荷物を整え、明日の飛行機を待つばかりだ。

ところが三日目の夕方、市役所にある、新疆の省都ウルムチ市へ通じる唯一の電話に優先順位をもらって、飛行機の交渉をしていた金通訳の顔色がだんだん険しくなった。電話口に向かって、大声で何か怒鳴っている。そばで付き添っている辺通訳も、青ざめた顔になった。

木島は言葉がよく分からないので、まだそばで楽観して見ていた。

観光団の全員は、ルポライターの彼を中心として、週刊誌記者、挿絵画家、テレビプロデューサー、編集者などで、若くて気楽で、明日は明日の風まかせの気持ちがある。十五日間の日程の終わりに東京へ帰れば、別に毎日のスケジュールがどうなっても、あまり気にかけない。木島も、のほほんとしていたが、電話を放した金通訳が、ウルムチでの会話の内容を報告して、さすがに青ざめた。

「本当は明朝来る予定だった飛行機が、出ないことになったのです」

「えっ……」

「一応、中央政府の方針でホータンは開放都市として、旅行者を入れることにしたのですが、一昨日の中央人民会議で、それはまだ早いのではないかという、政府有力者からの意見が出て、急に開放地区指定が取消になったのです」

「それはまあー、中央政府の勝手だが、我々は一体どうなるのだね」

「それで、この土地へはもうウルムチから飛行機が来なくなったのです」

「もう飛行機が来ない。我々はどうしてこの町を出ていくのだね」
「これからは砂漠を抜けるには、バスしかないのですが、実は、このホータン市にはバスはありません」
「えっ。それでは歩いて砂漠を渡って帰れというのかね」
「さっきの電話の話では、それも仕方がないだろうというのです。いくら何でもそれはあんまりなので、ウルムチ政府に厳重な抗議をしました」
「当たり前だ。観光客を離れ小島に送り届けながら、帰りの船がないというのと同じようなものではないか。あまりにも無責任だ」
そう金通訳を叱りつけたが、しかしこれは少し無理だ。木島が憤慨するのは当たり前だが、金通訳たちは、中央政府の方針だからどうにもならない。
タクラマカン砂漠というのは、一度入ったら二度と出てこられない砂漠という意味を持っている。歩いて砂漠の中を突っ切ることは不可能だ。
どこへも行く所がなくなった一行に何と弁明したらいいだろう。
その日の夕方、ホテルへ帰って明日の飛行機のスケジュールを発表する予定になっていた彼らは、帰ることもできず、そのまま市役所で、額を寄せあって会議を始めた。

二

改めて市役所の小さな応接室で、地図を借りて広げてみた。タクラマカン砂漠を迂回して千

キロ近く走ると、ソ連との国境に面したカシュガルという、昔からの回教都市がある。これはローマから北京へ通じるシルクロードに面した町で、既に十年も前から開放都市となっていて、一週に三便のウルムチまでの定期便があり、ウルムチまで行けば北京へは毎日の航空便がある。このあたりに詳しい辺通訳は、地図を見ながらそう説明した。ともかく、カシュガルまで何とかバスでたどり着けば、また北京へ戻るルートに乗れる。

木島は辺通訳にいった。

「我々はいつまでもここにいるわけにはいかない。何しろ旅行者だ。一日延びれば、一日分費用がかかるが、やがて食べ物を買う金もなくなってしまう。そうしたら、みな飢え死にだ。旅人を秘境に送りこんだのはいいが、帰りの足がないと、そこで見捨ててしまったら、これは重大な国際問題になるぞ」

よその国ではまったく考えられないような深刻な事態になっていた。冗談事ではない。楽しい旅行団変じて砂漠の真ん中の小さな町での、職も金もない難民になってしまう。

もう一度市役所の役人に特別に頼んで、北京までの電話をかけてもらった。金通訳が、北京の本社にいる自分の上司に、状況をはげしい声で訴えるが、旅行社からの返事は、『そんな遠くの町のことは、こちらではどうする方法もない』という、木で鼻を括ったような返事らしい。金通訳が噛みつくようにした抗議も、あっさり向こうから切られてしまった。

「ともかく、航空便が廃止されてしまっては、どうにもなりません。ラクダを雇うなり、荷馬車に乗るなりして、あらゆる手を尽くして、自力で脱出してくれとのことです」

木島はそれに、

「いい加減なことをいうな！」
と怒鳴りつけたが、それもどうにもならなかった。
その会議というよりは、もう罵り合いになってしまった二人の交渉をきいていた辺が、そこで泣きそうな顔で口を出した。
「私に少し考えがあるのですが」
まだ幼さの残ったあどけない顔だが、自分の責任だと感じて、必死の思いが出ている。
「私の父がカシュガルの自動車公司の一等書記をしております。会社関係の主任でもあります。多分、金通訳さんか、木島さんが、旅行費の中から別運賃で払ってくだされば、バスを出すことができます。運転手には別に、日当の倍増しぐらいのプレミアムをつけてください。私が必死に頼めば、父はとても私を可愛がってくれているので、大概のことはきいてくれます」
現在の中国で、バスを特別に配車するということは、大変重要な国事行為だ。娘が可愛さのあまり、親が頼まれてできるような半端なことではないと、金にも木島にも思われた。
しかし、また、外部の諸外国の常識がまったく通用しないのもこの国だ。
「ともかく、カシュガルにいるお父さんに電話してごらん」
と木島がいった。何としてでもカシュガル市まで出向かないことには、十五人の旅行団が再び文明世界へ戻る道はないのだ。
辺はもう一度役所の電話係に頼んで、カシュガルに電話を回してもらった。金が素早く電話係のポケットにかなりの札をねじこんだ。
千キロ近く離れたカシュガル市だが、タクラマカン周辺の衛星都市として、昔からこのホー

タンとは隊商路が通じていて、密接な関係をもっていた都市だけに、電話回線もこれまでかなり使われていたらしく、臨時の申し込みだったのに、ほんの三十分ほどで通じた。

辺の父親のいる、カシュガル国営自動車公司にもすぐ通じた。これまで金通訳には正確な北京語でいろいろ話していて、多少堅苦しい感じだった辺通訳が、電話に父親が出ると、とたんに甘ったるい声にかわった。それも北京語を正確に話す金がびっくりしてきくような、違う言葉だった。

金は木島に教えた。

「上海語ですよ。それも、文革前にずっと上海で贅沢に暮らしていた、インテリの上流階級の間に遣われていた言葉です」

木島が驚いてきく。

「それはどういうことだね」

金は自分の日本語が木島以外には誰にも分からないことを知っていながら、その市役所の応接室の隅で声を低くしていった。

「文化大革命ですよ。……今から二十一年前にこの国には、突然、異様なまでの嵐が吹きすさびました。日本でいえば、昭和四十一年のことです」

木島団長は四十歳を越している。だから、そのときのことを少し思い出した。まだ二十歳になったばかりで、W大学で勉強していたころのことだ。

ある日校内の、いつも左翼系の学生が群れている運動場の隅の、体育館と音楽教室に挟まれた三角の広場に、いつもより沢山の赤い旗が立ち並び、演壇代わりの箱の上で、学生がマイク

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.